



セーラムライト

村上醍醐

いつの間にか、タバコの残りは一本になっていた。

軽く舌打ちをして中身を摘み出した後、ソフトケースを握り潰し視界の右端にあったゴミ箱に向かって放り投げた。ちゃんと入ったかどうかは見ていない。たった一時間前に買ったばかりのキャスターマイルドだった。この一時間、ずっとここで吸い続けていたのだろうか。どうも意識がぼんやりとしていて判然としない。

はっきりしているのは、一時間前に祖母が死んだ——それだけだ。

改めて周囲を見回してみる。今自分のいる場所を確認するためだ。ここは、祖母が入院している——いや、していた病院の外にある休憩所。

東屋になっていて、四方に風が吹き抜けていく。ベンチに座って当たる風はいつの間にか随分涼気を纏ったように感じる。

そういえば、今はもう秋なのだ。そう思い出す。

最後の一本に火をつけようとするが、風のせいでライターの花がかき消えてしまう。左手で囲いを作ってやらなくてはならなかった。

思い切り煙を吸い込む。気管を通過して肺に到達するのを感じ取る。数秒間、煙の味を楽しんでから、今度は思い切り煙を吐き出した。煙は左から右へと流れる風に吹かれて霧散した。それが悔しくて何度も煙を吐き出す。そうして、あっという間に最後の一本も限界まで短くなってしまった。

馬鹿みたいだ——そう俺は思った。

立って、一度大きく伸びをする。腰の辺りの骨が軋む音がした。

足は病院の入り口へと向かっていた。なんていうことはない。新しいタバコを買うためだ。多くの人がソファに腰を下ろして俯いているロビーを横目に、売店へと歩を進める。その途中で、怒気と疲れを同居させた声で名前を呼ばれた。振り向くと姉だった。

「ちょっと、あんた何やってるの。病室に戻ってきなさい」

俺は有無を言わず、姉の言うとおりにした。反抗する理由がどこにもないからだ。

少し歩いたところにあるエレベーターで祖母が入院していた病室のあるフロアまで上がる。エレベーターの中では会話はなかった。姉はずっと、俺と同じように扉の上の階数表示を見つめているだけだった。

目的の階に到着して、二人並んで無言のまま病室に向かう。道中の廊下は、いつにも増して陰気に満ちていた。

どうして病院というのは他のどんな場所よりも生命を扱う場所であるのに、こんなにも生気が欠如しているのだろう。壁を覆いつくす白ほど無機質な白はない。俺もこんな場所で最期を迎えるのだろうか、とふと思う。しかし、思っただけで、とてもではないが想像はできなかった。

だが、現実として祖母はここで死んだ。たった一時間前のことだ。

祖母はここで死んで幸せだったのだろうか。そんな訳はないと分かっているながらも、考えずにはいられなかった。それは祖母のためではなく、自分の正気を保つためだ。

正直なところ、ここまで祖母の死に茫然自失となることは、自分のことながら意外だった。昔

から祖母のことは嫌いではなかった。しかし、おばあちゃん子というほど大好きでもなかったはずだ。

祖母は父の母親に当たる。母方の祖父母は共に俺が小さい頃に亡くなった。また、父方の祖父は俺が生まれる前に亡くなっている。そんなわけで、俺が物心付いたときには祖母しか「おばあちゃん」と呼べる親族はいなかった。

小さい頃の祖母のイメージはとにかく「タバコを吸う、ヤンキーみたいなばあちゃん」だった。とにかく四六時中吸っていた。確か買うときは必ずカートンで購入していたはずだ。どんな時も次のストックがないと気が済まない人だったのだ。子供の俺と話すときでも、タバコの煙をぷかぷかとさせていて、よく母に小言を言われて顔を顰めていた。

俺が一番多く見たのは祖母のそんな表情だった気がする。

俺自身はタバコの煙が嫌いというわけでもなかったし、特別吸いたいとも思わなかった。両親はタバコを吸ったことがないと言っていたし、きっと自分も一生吸わないだろうと思っていた。

そんな俺がタバコに手を出したのは、皮肉ながら祖母の介護を始めてからだ。

昔、祖母の手元には必ずタバコの箱と百円ライターが置いてあった。確かその頃吸っていた銘柄はセブンスターだったと思う。随分と重いものを吸っていたわけだ。

それでも、祖父母の中では一番の長生きということになる。話を聞いた限りでは喫煙癖があったのは祖母だけ。もしかしたら、祖母は早く死んで旦那を追いかけていとでも思っているのだろうか、と子供ながらにませた考えを起こしたことがあった。でも、そんな想像に反して祖母は元気に余生を過ごしていたように思う。一年に一度は祖母を含めた家族旅行に出かけた。その多くが温泉地だった。おかげで全国の温泉について詳しくなった俺がいる。

そんな祖母がとうとう体調を崩したのが二年前。そこからはまさに谷を転がり落ちるような速さで衰弱していった。

まず、恒例の温泉旅行がなくなった。その年は箱根に行く予定だった。

次に、外出が不可能になった。体力がもたなくなっていて、杖が生活必需品となっていた。その杖は時が経つにつれて仰々しくなり、材質も何やら軽いカーボン製になったり、足の本数が増えたりと、まるで小学生の服が買い替わる様に似ていた。

そのうち、家の中での移動も儘ならなくなり、両親は貯金を崩してバリアフリー仕様に自宅を改築した。

その頃になると、俺が数秒で行けるトイレまで、祖母は数分をかけて移動するまでになっていた。随分身体の線も細くなっていた。

それでも、タバコは頑としてやめなかった。

始めのうちは医者も両親も口癖のように禁煙を促したが、そのうちに諦めたようだった。祖母がタバコに火をつけるたび、彼らは溜め息をつくだけになった。

いや、諦めたのではないだろう。

近いうちに死ぬのなら、せめてそれまでは好きなことをさせてあげよう——そんな声が聞こえてきそうな溜め息だった。

俺がタバコを吸い始めたのは、その頃だったのだろうか。移動介助や食事介助が終わったあとに

ベランダの外に出て、タバコを吸うのが日課になっていた。

おそらく最初に吸った銘柄は祖母の持っていたセーラムライトだろう。その頃になると、さすがにセブンスターはやめてセーラムライトになっていたのだ。

初めてタバコを吸った感想は、「悪くない」だった。始めこそ咽てしまったが、慣れてくると、煙を吐き出すのが快感になってきて、あっという間に一本吸い切ってしまった。それからいくつか銘柄を吸ってみて、今愛用しているキャスターマイルドに落ち着いたわけだ。

「そういえば……」

新しいタバコを買っていなかったことを思い出す。空中で右手を意味なく握ったり開いたりしてみた。

「何よ」

「いや、何でもない」

姉が怪訝そうな目で睨んだので、目を逸らした。今、売店に戻ろうものなら後で何を言われるか分からない。仕方ないので歩き続けることにした。

祖母をこの病院、いわゆるホスピスと呼ばれる施設に入れたのは、度重なる発作に俺たち家族の負担が限界を超えたからだ。いわゆる「介護疲れ」と呼ばれるアレだ。

介護疲れは、みんなが思っている以上にしんどい。聞いた話では、介護から解放されて肩の荷が降りた直後に自分もその後を追いかけてしまう人も少なくないそうだ。

我が家では、父と姉は仕事で忙しいため、パートを辞めた母と、地元の大学に通う俺で分担して介護を続けていたが、俺も今年の春から社会人になり母の負担が一気に増えるということで、三月から祖母をどこか施設に預けることにした。

祖母はこのことに関して何も言わなかった。初めて施設に入らないかと話をしたときも「そうかいそうかい」と何度も頷いていた。そして最後には「ご苦労さん」とも言った。

そのとき、俺の中にあった理想が瓦解した気がした。思いやりでは、介護は続けられないと思い知ったのだ。

介護なんてものをする前、俺は介護とは人道的な義務感から行うものだと漠然と感じていた。死が近づいている人に対して何もしないことは、その人の死期を早め、それはつまり、その人を死に追いやっているということではないのか、というある種の恐れがあるのでないかと考えていた。

「死」は恐ろしい。

精神異常者でもない限り、目の前で人が死ぬところなど見たくないだろう。それはホスピスという形で現れている。人間は誰しもが老い、病気もする。その処理の全てを医療に任せている。その結果、家庭から老いも死も遠ざかった。

俺は、そうではなくて「共に生きていこうとする」介護を目指した。家族が行う介護ならそれができると思った。

しかし、共に生きると一言と言っても、そんなことが簡単にできるわけではないのだ。

死生観にしたってどうしても個人の価値観が存在し、食い違うこともある。行為を規定するのは、その人の持つ価値観だ。規範があったとしても、それよりも価値があると信じるものが心の中に存在すれば、その人は規範を逸脱するだろう。

例えば、目の前には、激痛に苦しむ癌患者。もう、どんな治療も効果がない。この人にとって、このまま苦しみながら生きることは、望ましいのか。この人は、近い将来死ぬことが決定しているのに。

このまま短い「生を苦しみ続ける」ことより、いっそのまま「痛みのない死」を与えることのほうが、この人にとっては望ましいのではないか。ここにある規範は、「人を殺してはいけない」ということだ。

ある人の価値観が「苦しみつづけるより、楽になったほうが良い」と告げており、「人を殺してはいけない」という規範より、自分の価値観の方が大切だと思えば、その人は規範を逸脱して、この癌患者を殺すことになる。

つまり介護に関わる人間はどうやっても、自分の価値観からは逃れられない。このジレンマはいつまでも拭うことはできなかった。

祖母が言ってくれる「ご苦労さん」の一言だけが救いだった。でも、ホスピスに入れるときでも変わらず「ご苦労さん」。祖母の表情はいつもと何一つ変わらなかった。

このホスピスを見つけるまで、去年の末から母と二人で色々な老人ホームなどを見学して回った。

ほとんどの老人ホームでは、職員の数が絶対的に不足しているのか、職員は常時慌ただしく動き回っており、毎日の業務に追われている印象が強かった。

正直に言えば、祖母をこういう場所に連れて来たくはなかった。ここで毎日を過ごすなんて一種の祖母に対する仕打ちなのではないかとも思えた。

ある施設に見学に行った際、ちょうど通り雨に遭遇したことがあった。入所者が多く集まる広いフロアの一角で職員から説明を受けているときのことだ。屋根を叩く雨粒の音に恐れを感じたのか、一人の女性老人が杖を片手に慌ててフロアを出て行こうとした。それはまるで逃げようとしているようだった。

俺たちと話をしていた職員が一言「すみません」と言ってから彼女の方に走っていった。そして目の前で膝を折って目線を合わせて「どうしたの」と努めて優しく声をかけた。

「家に帰るの」

老人は、言った。そして俯いて、

「帰りたい」

そう続けた。

「でもね、雨でバスも電車も止まって帰れないかもしれませんよ。今は中でじっとしていきましょう」

職員は笑顔でそう言いながら、彼女を力づくで元いた場所に戻した。彼女はずっと俯いたままだった。

介護職員はとても辛い仕事なのだと、そのとき思った。

結局、このホスピスがかかりつけの医師の紹介だ。ちょうどベッドに空きが出たということでそれほど待つことなく入院することができた。三月の中旬のことだ。

始めはほぼ毎日見舞いに訪れたが、さすがに仕事が始まってからはそうもいかなくなり、週に一度土日のどちらかに来ることしかできなくなってしまった。

見舞いに来てすることと言えば、一緒にタバコを吸うことである。祖母を車椅子に乗せて所定の喫煙所まで行き、二人で訥々と話をしながらタバコを吸うのだ。

俺はキャスターマイルド。祖母はセーラムライト。

そして共に一本吸い終わると、おもむろに病室に戻るのである。そんな俺たちを、病院のスタッフたちは思いのほか温かい目で見ていた。そんなところを俺は気に入っていた。

それに、今の職場にはあまり喫煙者がおらず俺は入社以来肩身の狭い思いをしていた。同僚は口を揃えて「禁煙しろ」と言うが、祖母が活着ている限りそれは到底できそうになかった。

ちょうど廊下の角を曲がる際にその喫煙所が目に入ったが、そこには誰もいなかった。

「なあ」

姉に呼びかける。

「なに」

姉はまだ憮然としている。というより、懸命に感情を押し殺しているんだろう。

「病室でなにをするんだい」

「荷物の整理よ」

「……冗談だろ」

「いいえ本当よ。明日には次の人が入るんですって」

思わず閉口した。

姉が押し殺していた感情は悲しみではない。怒りなのだと、そのとき気付いた。

病室の前で立ち止まる。扉の脇に書かれている名前も明日には書き換えられるのだ。そう思うと、胸に寂寥感が去来した。

病室には、両親がいた。

二人で淡々と荷物の整理を始めていた。姉が先にそれを手伝い始めたが、俺はなかなか動くことができなかった。

ふいに、ベッドの脇のある引き出しに姉の手が伸びた。それを慌てて止める。

「ここは俺がやるから」

そこはタバコが入っている引き出しなのだ。

静かに取っ手を引く。

そこには、開封済みのセーラムライトの箱が一箱あるだけだった。

荷物の整理は三十分ほどで終わった。

それから、両親と姉は担当医と話をしてくると言って病室を出た。俺は一緒には行かなかった。

一人で向かった先は、一階の売店だった。

病室に残っていたセーラムライトは一本しかなかったからだ。しかし、ふと思い直して、何も買わないまま売店を後にした。

外に出て、さっきの東屋に足を向ける。風はますます冷たくなっていた。

ベンチに座って、セーラムライトを口に啜える。火はまだ付けない。

ふと、遠くから救急車のサイレンの音が聞こえてきた。近づいてくるその音から想起される苦い思い出がある。

最初に祖母が発作を起こしたとき、最初に発見したのは俺だった。混乱していた俺は、救急車を呼ぶ前に外出していた母の携帯電話に連絡した。母の指摘で気が付いた俺は慌てて救急車を呼び、一緒に病院に向かうことになった。車中、隊員が必死に処置を施すその横で俺は呆然と佇んでいた。

その渾然とした頭の中では、様々な打算で醜い考えが乱舞していたのだ。

「助かるだろうか」

いや、

「もし助かってしまったらどうしよう」

そして、

「介護をすることになったら……」

だったら、

「助からないほうがいい」

ああ、

「ばあちゃんもきっとそうだ。このまま死なせて欲しいって思っている」

だから、

「死なせてやって欲しい」

お願いだから——！

「死んでくれ」

一瞬にせよ、そんなことを考えた自分に嫌気が差す。それでも、祖母がまだ当分生きられると分かったときの安堵感も本物だ。

もちろん、祖母にはいつまでも生きていて欲しい。だが下衆めいた感情が確かに存在するのも現実だった。

そんな考えが脳裏を過ぎるたびにタバコを吸ったものだ。

でも、それも今日で最後にしよう。

セーラムライトに火を付ける。

大きく一度煙を吸い込むと、いつもとは違う味が口内に広がる。あまり美味しいとは思わない。早々に煙を吐き出す。先程と同じように、吹きぬける風に霧消していく紫煙。

それを見て、啞えていたセーラムライトを口から離してベンチを立つ。東屋を出て、ある場所に向かう。

そこには大きなアカシヤの木が立っている。

一度セーラムライトを口に戻してから、根元に手で小さな穴を掘った。

そこに、セーラムライトを立ててやる。

細く、だが消えることなく天に向かって紫煙が伸びていく。

「ばあちゃん、最後の一本だ」

そして、明日から禁煙することを決めた。